

【患者さんを診ること】

さて、医者が患者さんを診る、ということはどういうことでしょうか。

「ええ？何を今更・・・先生どうされました？」と思われるかもしれませんが、まあ聞いてください。

私は患者さんを診察するとき、いろいろなお話をします。例えば、「今日は何時に起きましたか？」「毎日便は出ますか？」「昨日は仕事で無理したんとちがう？」等々。こういった一見何気ないお話が実は大切なんです。患者さんの日常がかなりはっきり浮かび上がって、その方の生活全体がイメージできるかどうかは漢方治療の第一歩なのです。

例えば、カゼで患者さんが来られたとしましょう。

「先生、からだガタガタふるえて、頭が痛いんです。」

「たいへんやね。それはいつからなの？」

「そうですねえ、昨日ぐらいからでしょうか。」

「ご飯食べてるの？」

「食欲はあるんです。」

「そうですか、じゃあ、べーっと舌を出して下さい。」

「べーっ」

・・・この方が、普段は体力のある人で働き盛り。そして仕事を休める可能性があるならば、葛根湯をお出しするだけでまず大丈夫です。舌の先端が赤ければ、葛根湯の正証（せいしょう）ですから、一〜二包のむだけで、もうその日のうちに治っちゃいますね。抗生物質なんかもちろん要りません。

ところがです。確実に休養がとれるのであれば、葛根湯や麻黄湯といった桂枝・麻黄のおくすりを服用して、あっという間に治ってしまうことが多いのですが、みなさん、いかがですか。すぐに休めますか。

「明日は仕事どうするの？」

「もちろん行きますよ。そんなん、休めるくらいやったら病院に来ませんよ。」

私は、よく「休みなさい、養生しなさい。」というので、「先生は、二言目には休め休めと言わはるけど、そんなんむりむり。」よく患者さんに言われます。まあ、それはそうですね。しかし私は、「休みなさいね」とお話ししたときの患者さんの表情をみて「休める人、休めない人、強く説得すれば休める人」を判断しています。休めない人は、どうしても不養生になりますから、桂枝・麻黄のおくすりに、小柴胡湯（しょうさいこう）に代表される柴胡剤を併用していきます。「休まんとあかんよ」というのは、「休めへんかったら治らへ

んで！」というおどしじゃないんです。その患者さんに適切な薬方がこういったやりとりで考えられるのですね。ここではもちろんニコニコとしてお話ししないといけません。こわい表情で「休め！」じゃだめなんです。ちょっと強く説得すれば休めそうな人だけに、わざと眉間にしわ寄せて「しっかり休みなさいね」とお話しています。